

前史 - ゴシック・リヴァイヴァル期



□A.W.N. Pugin(英)

1812~1852

「ゴシックとは具体化されたキリスト教信仰であり、例示された実践である。宗教も建築も下落した現在に対する処方は中世への回帰に他ならない」
～「対比」(1836)～



□J. Ruskin(英)

1819~1900

「いかなる時代の芸術も社会生活の表現でなければならない。中世の生活は職人に個人の自由を与えるものであったが、我々の生活はそれを禁じている」
～「ヴェネツィアの石」(1853)～

「ゴシック」という標語は用いないものの、ほぼ同時期に『職人の技芸』に対する崇高の念を論じる

後に機械工業生産に対するアンチテーゼとして捉え直され、装飾的造形礼賛者たちに影響を与える

前史 - 新たな時代の予言者



□G. Semper(独)

1803~1879

「建築は基壇／炉／骨組／被覆から成る」
「隔離としての包皮機能から空間概念が生じ、被覆が仮象したが、素材や構法に依らず定型は概念的に持続され、被覆そのものが建築造形の母体となり、表現者となってゆく」
～「建物芸術の四要素」(1851)～
「歴史を慎重に咀嚼する既存の芸術型の解体」
～「様式論」(1860)～

アーツ・アンド・クラフト



□W. Morris(英)

1834~1896

アーツ・アンド・クラフト運動の主導者である。彼は「中世のクラフトマンシップを取り戻す」という標語の下、「分離された工芸と芸術を再度統合」や「芸術が労働の喜びの表現」であることを唱えた。そしてその果てに「作る人／使う人が喜びを得られる大衆のためのデザイン」という機械工業生産に対して皮肉を含めたマニフェストを打ち立てる。

□歐州各国の先駆けとなったアーツ・アンド・クラフト

産業革命以後「生産」は資本主義社会の支配下における工場制機械生産が主軸となる
→中流階級の台頭
→労働と余暇の線引き = 職住分離



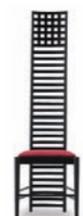
□C.R. Mackintosh(英)

1868~1928

アーツ・アンド・クラフト運動の推進者であり、近代英国を支えたインテリア・デザイナーである。

[pics]

Left above: ウィローティールーム / Left below: ヒルハウス / Right: ラダーバックチェア



アール・ヌーヴォー



□V. Horta(白)

1861~1947

彼の作品には、表層的にあしらわれたように見える装飾が、キリスト神学及びゴシックに対してアイロニカルな批判を担保するという思想が込められている。それはすなわち神が与えた造形は必然的／合理的であり、自然観によって機械的物質を捉え直すということである。

[pic]

タッセル邸



オランダ・アール・ヌーヴォー(仮称)

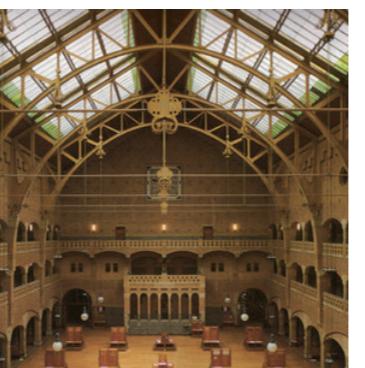
「テクトニックをめぐる視座を与えられた」とケネス・プランプトンは自身の著書『テクトニック・カルチャー』の中でペルラーへの名前を挙げる



□H.P. Berlage(蘭)

1856~1934

[pic]
アムステルダム証券取引所



モデルニスモ



□A. Gaudi(西)

1852~1926

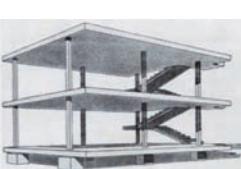
スペインにおけるモデルニスモは他諸国と比較しても長い時代であった。ガウディの読み替えを行いながら、スペイン建築が発展してきた過去を見つめると、ガウディの功績の大きさが伺える。

[pic]

above: サグラダ・ファミリア大聖堂 / below: ゲル公園



後史 - 造形表現主義の終焉／新たな時代の匂い



□1914 という年譜

第一次世界大戦(1914)によって表現主義時代は幕を閉じた。
cf. 1914年は建築界において重要な年号であった。

「ドミニシステム」発表
「ドイツ工作連盟・ケルン博覧会」
「空間・時間・建築」発刊

参考

□各国における装飾表現主義時代の呼称



アール・ヌーヴォー



呼称不明



ユーゲントシュティール



モデルニスモ



ゼツエッション(ウィーン分離派)



アーツ・アンド・クラフト

□アール・ヌーヴォー・リヴァイヴァル

過去の遺産とも言うべくして、一過性の退廃的なデザインと見なされたアール・ヌーヴォーであったが、アメリカにおいて1960年代にアール・ヌーヴォーの再評価が成され、リヴァイヴァル・ムーブメントを見せる。その当時の評価とは新古典主義と近代主義を結びつける位置づけとしてのアール・ヌーヴォーというものであった。